流星のロックマン1.5
―Cassiopeia Duo―

はっぽーしゅ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロックマンがＦＭ星人の脅威から人知れず地球を救ってから少し。スバルたちが暮らすニホンでは、電波ウィルスが原因不明の大量発生を起こしていた。

そんなニホンのコダマタウンに、北空ミナミという少年がいた。トランサーを持たない孤独なミナミは、突如飛来した記憶喪失の電波生命体『カシオペア』に取り憑かれ、新たな電波人間『カシオペア・レグナント』へと電波変換してしまう。

ロックマンの半身である宇宙人ウォーロックによれば、カシオペアは過去の記憶を失くしてこの地球に流れ着いた、あのＡＭプラネットの女王なのだという。

既に滅びてしまった電波文明の元女王と、周囲とのツナガリを断たれて久しい孤独な少年。性格も性別も種族すらも異なる、歪で凸凹なひとりぼっちの二人組。しかしその波長は二重奏の様にピタリと重なり、再び脅威に晒されつつある水の星でひとときの輝きを放つ。

「ククク、頭が高いぞウィルスどもよ。ヨは宇宙の女王様なんじゃけど?」

「いいから早くやっつけようよ…」

二人で一人のふたりぼっちは、今日も電波をかき分け飛び回る。緑に輝く電波世界のお騒がせニューヒロイン、カシオペア・レグナントとして。

※ゲーム版流星1エンディング後のお話です。2、3の要素はほとんどありません。

※性転換タグは念の為です。電波変換すると少年がナイスバディな女性型電波人間になります。

※少年と電波女王のバディものです。某電車で時を超える仮面のヒーローみたいなイメージ。尚、恋愛要素はあんまりありません。

※オリジナルの設定や表現があります。

※アニメ版の表現や設定に引っ張られてしまう場合もありますので、その際はどうか生温かい目で見守ってください。

要約：なんでも許せる人向けです。

目次

プロローグ：ヨは女王じゃ！ ―― 1
第1話：ロックマン、星河スバル（ヨの出番がないんじゃけど!?） ―― 5
第2話：ボーイ・ミーツ・カシオペア（いわゆる未知との遭遇じゃ！） ―― 11
第3話：降臨！お騒がせ女王（存分に騒ぐがよいぞ！） ―― 29
第4話：ロックマン・オン・エア（またしてもヨの出番が!?） ―― 43
第5話：女王の挽回!?（ごめんなさいなのじゃ！） ―― 62
第6話：一難去って?（また一難じゃ！）

プロローグ：ヨは女王じゃ！

彼女が目覚めた時に最初に見たのは、視界を覆う真っ赤な炎だった。

覚醒しきらない意識のなか、轟々と燃える鈍色のナニカを眺める。彼女はぼんやりと、自分はついさっきまでアレの中にいたのだと感じ取った。

やがてそのナニカが燃え尽きると、彼女の視界は赤から一転、美しい青と黄の二色に染まった。

眼下に広がるのは、紺碧の海原と白い雲。青い煌めきを放つその惑星は、網細工の様に複雑に重なり合う黄色い光のラインに全体を覆われている。そしてその周囲には、どこか懐かしい気配を放つ三基の人工衛星が浮かんでいた。

「ここは…」

見知らぬ惑星を見下ろしながら、ぽつりと呟く彼女。波打つ緑色のエネルギーで全身を構成された彼女は、その細長い首をうーんと傾げた。

「ここは…どっじゃ…？」

一般的な生物で言えば『目』に当たるであろう部分が、不思議そうににょろりと歪む。彼女の顔は、黒く縁取られた白い仮面の様な顔だった。そして、その仮面を中心から上下に分つ様に、大きなジグザグを描く緑のラインが左右に伸びている。アルファベットのWにも見えるこのラインこそが、彼女の目。彼女がその感情を表情として出力する事ができる、彼女唯一の器官であった。

「ふぅむ…しかし、なんと美しい星じゃろうか。ヨの次くらいに美しい」

初めて見る神秘的な水の星に、うっとりと見入る彼女。さらりと飛び出た最後の言葉に、彼女の高慢な気質が見て取れる。

「ようし、決めたぞ。この惑星をヨの新しい別荘とする！」

そう言うやいなや、彼女は緑色の光球へと姿を変え、光の筋を引きながら矢の様に地表へと飛び込んでいった。

「ククク！あぁ、名も知らぬ美しき星よ。今日からオヌシはこの宇宙の女王、カシオペアのモノになるのじゃ！ククク！ところで」

くつくつ笑いながら地表を目指す彼女は、自信マンマンな心持ちのまま、はてと考えた。

「カシオペアとは、ヨの名前か？それに女王とは一体…むむむ…？」

自分で言った言葉に自分で悩み始める彼女。不思議な事に、彼女は自分の名前はおろ

か、出自や過去の思い出といった、己に纏わる全ての事が思い出せずにいた。
「うむ、まあよいか！」
だが、彼女に――カシオペアにとっては、そんな事は些末事に過ぎなかった。
「この胸から溢れて止まぬ、全く根拠のない自信とパッション！かようにバイタリティ溢れるスーパーレディなこのヨが、宇宙の女王でないワケがないのじゃ！あと美人じゃ！絶対に美人じゃ！」
白い絨毯の様な雲の上で、水平線の彼方まで伸び続ける電波の道、ウェーブロードに降り立ったカシオペアは、元の幽霊の様な姿に戻りつつ、腰に手を当ててアッハッハ！と豪快に笑った。
強靭無比な精神力と、山よりも高いプライドを誇るカシオペアには、記憶喪失などなんの足枷にもならないのだ。
「ふぅむ。大気の成分から察するに、この星は物質生命体の星であるに違いない。ならば！」
エネルギーで出来た緑色のロングヘアを風になびかせながら、カシオペアはぶ厚い雲を突き抜け、飛んでいく。
「バディをさがすぞ！電波変換じゃ！」
自身と波長の合う誰かを求め、直感を頼りに突き進むカシオペア。電波生命体である

彼女は、物理的な肉体を持つ知的生命体と融合する事で、更なる力を発揮するのだ。
この星に知的生命体がいる事は、あの三基の人口衛星とウェーブロードを見れば一目瞭然。あとは、相性の良いパートナーをさがすのみ。
「おるかー、おるかー!?美少年か美少女おるかー!?」
あっちへビュビュン、こっちへビュビュン。ジグザグとめちゃくちゃな軌道を描きながら、思うがままに大空を翔けるカシオペア。人間の眼には見えない緑のイナズママークが、太平洋の上空に広がっていく。
「むむっ!」
と、そこでカシオペアの直感がビビッと反応した。青い水平線の遥か彼方から、やけに強力な電波の波長を感じる。
いくしかない。カシオペアは迷わずその一点を目的地に定め、光の矢となって飛んでいった。
彼女が目指すその場所は、大陸のすぐ隣りに浮かぶ小さな島国。この星の知的生命体たちが、ニホンと呼んでいる国だった。

第1話：ロックマン、星河スバル（ヨの出番がないんじゃけど!?）

ニホンの中心部近くにあるのどかな町、コダマタウン。その町の上空に浮かぶウェーブロード上で、人間の眼には見えない、激しい戦いが繰り広げられていた。

「バトルカード、プレデーション！」

時刻は夜の２１時。暗い夜空の下で、小さな青い戦士が風の様にウェーブロードを駆ける。

「スイゲツザン！」

左手を水色の剣に変化させた戦士が、正面から突っ込んでくる敵に向かって、真っ向から斬りかかっていく。

「ええいっ！」

すれ違いざまの一閃。その一撃で、下半身に一輪車を生やした赤いダルマの様な敵性体は、熱く燃えるその身体を真っ二つに斬り裂かれ、消滅した。

「これで全部みたいだな」

消滅した『モエローダー』の残滓を振り払い、剣から元のカタチに戻った戦士の左手が、意志を持っているかの様にしゃべりだした。彼の左手は、青いケモノの生首の様なカタチをしていた。

この左手のケモノの名は、ウォーロック。少し前にこの地球に飛来した宇宙人で、電波で構成された肉体を持つ電波生命体だ。

「そうみたいだね。ふぅ、つかれた…」

そんな宇宙人を左手に生やした小さな戦士は、声変わり前の幼い声で、ウォーロックに対して親しげに返事をした。

「毎日毎日、イヤになっちゃうよ」

「いいじゃねぇかよスバル。学校ばっかじゃウデが鈍っちまうだろ？特に左ウデがな」

「いいよ別に鈍ったって。はぁ、母さんへの言い訳どうしよう…」

「五日連続で無断外出だもんな？不登校の次は非行少年か。ギャハハハハ！こりゃ傑作だぜ！」

「ちぇっ、他人事だからって…」

スバルと呼ばれた少年は、青い戦士『ロックマン』の姿のまま滑る様にウェーブロードを駆けた。早く家に帰らないと、母親を不安がらせてしまう。

「また委員長にでも口裏合わせてもらえよ」

「そうだね、それがいいかも」
　自分の正体を知る『ブラザー』の女の子に心の中で謝りつつ、スバルは家路を急いだ。
「今日はなんて言おう…委員長の家に忘れ物を取りに、とか…？」
「そいつぁいいな。オフクロさんも大喜びだろ」
「なんで？」
「そりゃお前、一人息子がしょっちゅう忘れ物しちまうくらい女の家に入り浸ってるとくりゃあ」
「う…やっぱナシで」
　スバルは顔を赤くして首を振った。そうだ、『委員長の家に忘れ物』は一昨日も使った設定だった。
「昨日はゴン太で、前の前はキザマロで、その前はミソラちゃんで…あぁ～どうしようロック…？」
「んなもんテキトーでいいだろ、借りもん返しに行きました～とかでよ」
「うーん…」
　悩んだ結果、今日は『キザマロのメガネクリーナーが何故かポケットに入っていたので慌てて返しに行った』という、あまりに不自然なストーリーになってしまった。しどろもどろになりながら説明するスバルを、彼の母である星河あかねが懐疑的な目で見つ

めていたのは、言うまでもない。
「スバルお願い、あんまり母さんを心配させないで？最近なにかと物騒なんだから…」
「うん、ごめん母さん…ごめんなさい…」
本気で自分を心配してくれている大切な母親に、ロックマンから普通の小学生に戻ったスバルは心から謝った。
数年前に父を亡くして塞ぎ込んでいた自分を、根気強く支え続けてくれたあかね。愛する夫を失い、一人息子は不登校。きっと一番辛かったのは彼女のハズだ。それなのに…
「ほら、早くお風呂入ってきなさい。今日はスバルが一番好きな入浴剤よ」
…母さんはいつだって、ボクの味方でいてくれた。
「ありがとう、母さん…」
「なにか言った？」
「ううん、なんでもない」
洗い物をする母に感謝の念を送りつつ、スバルは浴室へと向かった。
「はぁ…どうして急にウィルスが増えたんだろう…？」
熱いシャワーを浴びながら一人呟くスバル。流したシャンプーが口の中に入り、不快な苦さに慌ててペッ！っとツバを吐いた。

「ふぅ…しかし、どうして急にウィルスが増えやがったんだ…?」

そして、スバルと分離したウォーロックもまた、星河家のリビングに浮かんで一人ごちていた。

リビングにはウォーロックの事など何も知らないあかねがいるが、彼女はウォーロックの存在に全く気づいていない。彼の身体が不可視の電波だからだ。

『次のニュースです。ニホン各地で頻発している電波ウィルス関連の事件について、サテラポリスは本日１４時――』

リビングに設置された液晶テレビからは、ニホンの警察機関『サテラポリス』の高官が会見に出席している映像が流れている。

「抜本的な解決案ねぇ…へっ、んなもんホントに考えつくのか?」

宙に寝そべりながらテレビに文句を言う様は、まるで仕事疲れの中年男性だ。スバルが見たら呆れた様にため息をつく事だろう。だが、ウォーロックが愚痴を吐きたくなるのも無理からぬ事だった。

ここ最近、様々な電子機器に被害を及ぼす現代社会の天敵『電波ウィルス』の発生が、明らかに激増しているのだ。

確かにウォーロックは、平和にのほほんと暮らすよりは暴れる事の方が好きだ。だが、戦う相手が無駄に数ばかりが多いザコウィルスの連続では、戦っている爽快感より

も飽きと怠さが勝ってしまう。

彼以上に嫌気がさしている様子のスバルの前では、これ以上やる気を削ぐまいと得意気に笑ってはいるが、そろそろウォーロックにも気疲れの色が出てきていた。

「どうせならもっとこう、パーッと派手に戦り合える様なヤツに来て欲しいもんだぜ」

両手を枕にして虚空で寝返りをうつウォーロック。そんな彼の身体を、何も知らないあかねがスルリとすり抜けていった。

第２話：ボーイ・ミーツ・カシオペア（いわゆる未知との遭遇じゃ！）

クラスメイトたちが時たま口にする『羨ましい親』とは、一体どんな大人の事なんだろう。

コダマ小学校５年Ｂ組の教室、その最後尾に位置する窓際席で、北空ミナミは左手首の白い電波時計をそっと撫でた。

今の時間は昼休み。活発な男子たちは校庭でドッジボールに精を出し、おしゃべり好きな女子たちは思い思いの相手と会話の花を咲かせている。

動のグループと静のグループ。そのどちらにも、ミナミの居場所はない。

「でさ、結局ウチの誕プレなんだったと思う?」

「え、わかんない」

「バトルカード！いやもうマジでないわウチのパパ！」

「あはははは！マジ!?」

「マジマジ！しかも見てよコレ、めっちゃダサいからホラ！」

「うわ、ダッサー·なにこれ、モアイ?」

楽しそうにはしゃぎ合う女の子たちの声。その声に混じって、カチャカチャ、ピピピ、といった無機質な操作音が、ミナミの小さな耳に飛び込んでくる。ミナミはもう一度腕時計を撫でてから、机に掛けたトートバッグに手を突っ込み、取り出したワイヤレスイヤホンでしっかりと両耳を塞いだ。

彼女たちが…否、この世界に生きる大多数の人々が右か左の腕に装着している、多目的情報端末『トランサー』。モバイル機能に電子マネー、インターネット接続に電子パスポート、更には専用のデータカードを用いたウィルスバスティング機能まで搭載しているこの端末は、もはや人々の生活に無くてはならない、最重要の携行必需品になっている。

「……」

そんなトランサーの操作音が、ミナミは大キライだった。その音を聞くと、何故か泣きたくなってくるから。

どうして泣きたくなるのか、それはミナミにも分からない。トランサーなんて、欲しくないハズなのに。

「うちのお母さんもさぁ…」

「いやいやうちの親の方が…」

「うちのがもっとひどいよ…」
耳栓代わりのイヤホンを突き抜けて、女の子たちのおしゃべりが聞こえてくる。敬うべき親を貶し、他所の親を羨ましがる声が。
ひどい子たちだ、とミナミは思う。大切な親に対して、陰でそんな悪口を言うなんて。他人の親を羨む暇があるなら、自分の親のいいところをもっと沢山見つけて、もっと沢山愛するべきだ。
窓の外に広がる退屈な景色を眺めながら、そう胸中で愚痴を吐くミナミ。そんなミナミに、件の女の子グループの中の一人がチラリと目を向けた。
男子にしては少し長い、よく手入れされた黒い髪が、窓から吹き込む柔らかな微風に揺れている。色白の頬に頬杖をついて、女の子の様な可憐さを持つ美麗な相貌を、アンニュイに曇らせている。
その画だけを見れば、儚く物憂げな美少年としてそれなりに人気が出そうではあるし、実際ミナミのルックスはかなり評判が良い。だが、今この時の女の子の視線は、彼の首から上では無く、左の手首に向いていた。
「…でもさ、ウチらまだいい方かな？ほら…」
「ちょっとアケミ、聞こえるって…」
「北空くんちはシャレにならないから…」

ミナミの席と同じ列の最前席で、コソコソと囁き合う三人の女の子たち。気まずそうな、しかし少しの優越感も含まれた好奇の視線が、気づかないフリをしているミナミをチクリと苛立たせた。

彼女たち5年B組の生徒たちは、皆知っているのだ。北空ミナミの母親は、子どもにトランサーを持たせないヒドイ親だという事を。

「……」

トランサーとは、ただの便利な携帯端末などではない。トランサー本来の役割は、ヒトとヒトの心をより深く繋ぎ合わせ、そのキズナを目に見える形で補強する『ブラザーバンド』を結ばせる事にある。

ブラザーとは、単なる友達や仲間を超えた、本当に信頼し合える相手の事だ。ブラザーバンドを結んだ相手とは、トランサーを通じていつでもお互いのパーソナルを閲覧できる様になる。普通の知人には見せられない、ありのままの自分を見せ合える関係という事だ。

だから、人々はそう簡単にブラザーバンドを結んだりはしない。ブラザーバンドは単なる友情や親愛を超えた、真のキズナとも言うべきものだからだ。

だからといって、ブラザーを持たない人間はトランサーが不要なのかと言うと、断じてそんな事はない。ブラザーバンドだけがヒトの繋がりではないからだ。

旧世代に普及していた携帯電話やＰＥＴの様に、トランサーはコミュニケーションツールとしての役割も負っている。電話やメール、チャット機能を用いて、人々は友人知人と連絡を取り合い、親交を深めていく。

そうして信頼関係を築いていったその先にブラザーという関係があるだけで、後は旧時代と何も変わらない。携帯電話を買ってもらえず寂しい想いをした大昔の高校生の様に、トランサーを持たない子どもはクラスメイトたちの輪から一歩はみ出してしまうのだ。

そんな境遇のミナミを、クラスメイトたちは可哀想だと言う。そして、ミナミの母親はヒドイお母さんだと、それに比べたら自分たちの親はまだマシだと、そう言うのだ。

「かわいそうだよね、北空くん」

「アケミ、ちょっと話しかけてみてよ」

「はぇっ!?」

だが、当のミナミはそれがヒドイ事だとは微塵も思っていなかった。

母さんは寂しがりで、ボクが他所で友達を作るのはイヤだって言うんだ。ボクが友達に夢中になって、母さんをひとりぼっちにしちゃうのがコワイって言うんだ。なら、ボクがトランサーを持つ必要なんて、これっぽっちも無いじゃないか。

「……」

ボクがひとりぼっちでいれば、母さんは幸せなんだ。なら、ボクは友達なんていらないし、トランサーもいらない。母さんの笑顔だけが、ボクの幸せなんだから。

「あ、あの～？北空く～ん？」

三人組のうちの一人、春野アケミが、いつの間にかミナミの机の横に立っていた。

「うん？」

ミナミは耳を塞いでいた白いイヤホンを外し、穏やかな微笑を貼り付けてアケミを見上げた。ボクに話しかけてこないでよ、という本音を隠して。

「ボクに用事？」

「え、えっとそれは、あの～…」

ミナミの小学生らしからぬアルカイックスマイルに、顔を赤くしてオドオドしてしまうアケミだが、無理もない。普段は何とも思っていない相手でも、とびきり美形の異性に優しく微笑みかけられれば、誰だってこうなってしまうだろう。

おまけに、ミナミは愛する母の言いつけを守って、身だしなみに非常に気を使っていた。肌と髪の手入れはもちろん、いつも着ている大人びた白のボタンダウンシャツは、自分の手でしっかりとアイロンがけまでして、完璧に仕上げてある。同年代の子どもたちから見れば、美しく小綺麗なミナミはそれだけで魅力的なのだ。

…その胸に隠した、拗らせに拗らせ続けた歪な本心を別にすれば、だが。

「大丈夫？顔が赤いけど」
「ほぁっ!?い、いや～なんか、ホラ！教室暑くって！あはは！」
「そう？ふふ、春野さん暑がりなんだ」
真っ赤な顔でアタフタするアケミに、ミナミは冷めた気持ちで微笑み続けた。
ほら、焦ってる。元から話したい事なんか無いくせに、無理しないでいいよ。どうせひとりぼっちのボクが可哀想で、オトモダチにでもしてやろうって話かけにきてくれたんでしょう？気持ちは嬉しいけど、やめてほしいな、そういうの。ボクは独りでいたいんだから。
「ふふ…」
光の宿らない昏い瞳で、ミナミはアケミに笑みを送り続けた。ミナミの瞳には、自分と友達になろうと必死になって言葉を探す春野アケミの健気な姿など、ヒトのカタチをした『モノ』にしか見えていない。
「ふふ、ふふふ…」
そう思わなければ、ミナミの心は壊れてしまうのだ。ミナミ自身に自覚は無いが、ミナミの心の防衛本能がそうさせていた。
寂しいなんて、人恋しいなんて、思っちゃいけない。感じちゃいけない。
脳裏に浮かぶのは、幼い自分とか弱い母を毎日の様に殴り続けていた、父の拳。そし

て、その父がある日突然蒸発した時の、母の泣き顔。
『ミナミ、ミナミ?ミナミは母さんをひとりにしないよね?ずぅっといっしょにいてくれるよね?』
痩せ細った、切り傷だらけの母の手首を思い出しながら、ミナミは思う。
羨ましい親とは、どんな大人なんだろう。

◇

放課後になった。ミナミはいつもの様にクラスメイトたちに愛想笑いを振りまき、真っ直ぐに家路を進んでいく。途中、隣のクラス担任を務める育田先生に、今から面白い実験をやるから参加しないかと誘われたが、家庭教師を待たせてしまうから早く帰らないと、と断った。
……別にウソはついていない。北空家には学習用ナビの『ティーチャーマン』がいるのだから。
「ふぅ…」
音楽を流す事なく、ただ耳を塞ぐ為だけにイヤホンを挿してミナミは歩く。ミナミの白い電波時計は、小型かつ高性能なスピーカーとディスプレイを搭載した高級品だ。

オーディオもムービーも再生し放題である。
……トランサーが普及している現代においては、全くもって無意味な機能と言えるが、それ故に一部の富裕層やマニアには人気があった。金持ちとオタクはムダが好きなのだ。
「ま、まてー！まってくれー！」
そうして耳を塞いでいたせいか、ミナミは少しだけ気づくのが遅れた。
「オレの、オレのバイクー！」
猛スピードで車道を飛び出してきた無人の電動バイクが、乗り手を置き去りにして自分に突っ込んできていた事に。
「うわっ!?」
ギリギリでバイクに気づいたミナミは、ほとんど反射で身体を左に投げた。なんとか躱しす事に成功し、アスファルトに強く打ちつけた肘と膝の痛みに顔を顰める。
「な、なんなの!?」
慌てて顔をあげ、両耳のイヤホンを外すミナミ。ミナミを襲ったバイクは、歩道上でギュルッとアクセルターンを決め、再びミナミに突撃してきた。
「うわぁっ!?」
ミナミは、母からもらった大事なトートバッグを歩道に放り捨てて、全速力で逃げ出

した。背後からは、自分を轢き潰そうと猛追してくる電動バイクの、甲高いモーター音が聞こえてくる。
「とまれー!・とまってくれよー!・オレのバイクー!」
バイクのオーナーらしき若い男が叫んでいるが、叫びたいのはミナミの方だ。
「こ、こないでよっ!?」
ミナミは再び身体を投げた。車道側のガードレールに飛びつく様にして、すんでのところでバイクを躱す。バイクは横断歩道を通り過ぎ、その向こう建っている民家の塀に激突し、ガッシャンと派手な音をたてて転倒した。
「はあ、はあ…とまった…?・」
みっともなくガードレールにしがみついたまま、バチバチと火花を散らすバイクを注視するミナミ。横倒しになったバイクは、未だにウィンウィンと激しくモーターを唸らせているが、流石に自力で立ち上がる事は出来ない様だ。
「あぁ、オレの愛車が……」
ようやく追いついてきたオーナーの若者が、ベコベコに凹んだバイクのフロントカウルにがっくりと項垂れる。きっと余程大事なモノだったのだろうが、そんな事よりまずは周りに謝りなよ、とミナミは唇を尖らせた。
「とにかくサテラポリスに…」

市民の義務を果たそうと、赤いトランサーを開いてサテラポリスを呼ぼうとする若者。

だが、事件はまだまだ終わらない。

「……え?」

周囲を見まわしながら、不安げな声を漏らすミナミ。先ほどのバイクとよく似たモーター音が、そこら中から聞こえてくる。

「まさか…!?」

ミナミの予感は的中した。大小様々なクルマやバイクが、乗り手の意思を無視してそこかしこで暴走をはじめたのだ。

大きなバスやトラックが、右に左に蛇行運転しながらガードレールを破壊する。乗用車は対向車と正面衝突を繰り返し、ドガン!ドガン!と恐ろしい破壊音を響かせた。

「キャー!」

「にげろ!」

「助けて、誰か助けて!」

平和な午後のコダマタウンは、一瞬にして地獄と化した。人々の悲鳴が耳を裂き、ミナミの口からは声にならない嗚咽が漏れた。

「にげなきゃ…!」

歳の割に長く伸びた脚をもつれさせながら、ミナミはしゃにむに走り出した。
一刻も早くここから逃げないと、自分もあのバイクみたいにペシャンコになってしまう。せっかくあの忌まわしい父親の魔の手から逃れたのに、こんなところで死ぬなんてまっぴらごめんだ。
バクバク暴れる肺に鞭打って走り続けるミナミ。だが、暴走車軍団はそんなミナミを逃しはしなかった。
学校から家までの、ちょうど中間辺りの交差点。そこまで逃げてきたミナミの前に、小さく細いシルエットの大群が押し寄せてきていた。
「そんな、自転車まで!?」
アシストモーターとナビゲーションを搭載した電動自転車。色とりどりの暴走自転車たちが、ギュルギュルとペダルを高速回転させながら、古代のファランクスの様に突撃してくる。
あまりに非現実的かつ恐ろしいその光景に、遂にミナミは尻餅をついてしまった。そして、暴走自転車たちはそんなミナミに、容赦なく迫ってくる
「うわあぁぁぁぁッ!?」
恐怖のあまり、悲鳴をあげる事しか出来ないミナミ。唐突に訪れた死への恐怖に、幼いミナミの精神は耐えきれなかった。

このままでは、ミナミは自転車の大群にその幼いカラダをズタズタに轢き潰され、見るも無惨な姿へと変わってしまうだろう。

『……た……ぞ……』

だが、天は。

『…けた……けたぞ……！』

否、『星』は、ミナミを見捨てていなかった。

『みつけた！みつけたぞ！ヨのバディ！』

恐怖に慄き、全身を震わせながら泣き叫ぶミナミ。

『ようし！ちょうどいいカンジにトラブっているようじゃし、早速ヨのチカラを見せてくれよう！そうれ、デンパァァァァ――――！』

その小さな身体に、眼に見えない緑の閃光が、イナズマの様に飛び込んでゆく。

『――――ヘンッカンッッ!!』

その瞬間、『北空ミナミ』はこの地上から姿を消し、代わりに、新たな黒いシルエットが姿を現した。

黒い影が、突っ込んでくる自転車群に向けて、素早く優雅に右手を振るう。すると、影の周囲にいつの間にか浮かんでいた八本の黒い剣が、意思を持つかの様に自転車たちに殺到し、その切先から緑のレーザーを雨あられと降らせ、自転車たちを一瞬で消し炭に

変えた。

「ふぅむ、ふむ、ふむ」

役目を終えた剣たちが、かしづく様に影のもとに舞い戻る。影の身体を支える様にぐるりと並ぶ黒い剣は、腰から生えた黒い翼か、もしくは、高貴な者が身に纏うロングドレスのスカートの様にも見える。

「なかなかよい〟乗り心地〟じゃ。うむ、流石はヨが見初めた美少年！周波数もバッチグーじゃし、なによりもう、マジで顔がよい！むほ～、めっちゃよい！」

緑のメッシュが入った長い黒髪をなびかせながら、影はスポーツショップのショーウィンドウに反射した自分の姿にうっとりと見入った。

ギザギザしたW状の、ティアラの様な黒いヘッドギア。その下の白くほっそりしたかんばせは、パッチリしたグリーンの眼と小さな唇で美しく飾られている。

「むふ～、むふふ～。ふつくしい。ふつくし過ぎて、ふつくしい」

緑と白のラインが入った、黒いボディスーツ。ピッチリしたそれに包まれた肢体は、一流のファッションモデルの様に細長く、しなやかだ。しかし、それでいて胸や腰まわりにはふくよかなふくらみがあり、女性的な妖艶さをこれでもかと主張している。

そんな艶やかな姿だが、ただ美しいだけではない。胸元にはヘビの眼の様な赤い宝玉が光り、そこを中心に胸元から両肩の先まで、剣の様に鋭い意匠のプロテクターが装着

されている。肝心の胸そのものが守られておらず、ふくよかで形の良い二つのふくらみが無防備に主張してしまっているが、影は全く気にしなかった。否、むしろ喜んだ。めっちゃよい、と。

「むっふっふ、それにしてもよいカラダじゃ。動きやすくやわらかい。いやはや、やはりカラダの相性は大切じゃのう、むほほっ！粘った甲斐があったわ！」

喜色満面でむふふと笑いながら、感触を確かめる様に足踏みをする影。黒いブーツ状の装甲がキラリと光り、針の様に鋭く尖ったハイヒールが、コツコツとアスファルトを鳴らした。

その場で足踏みを続けながら、影はグーパーと楽しそうに両手を動かす。細くしなやかな長い指。手首に巻かれた緑色の円いリング。全てが影の趣味にピッタリハマった、見事な出来映えだった。

「むふ、むふふ、むふふふふ！合格、合格じゃ！名も知らぬ美しきおのこよ！今日よりヨとオヌシは一心同体、ふたりでひとりの電波人間というわけじゃ！ククククク！とぉうっ！」

元の北空ミナミの肉体から、あまりにかけ離れたその全身。影はその場から勢いよく跳躍し、その身体の『周波数』を変化させた。

「しゅたっ！」

町の上空に張り巡らされた電波の道『ウェーブロード』に降り立った影。普通、生身の肉体を持つ者には、このウェーブロードを知覚する事は出来ず、触れる事も出来ない。だが、今の影はただの人間ではない、『電波人間』なのだ。

「ひかえおろう!有象無象のウィルスどもよ!」

黄色いウェーブロード上で、勢いよく右手を振るう影。彼女の視線の先では、先程消し炭にした自転車軍団の残骸から、巨大な一輪のタイヤを生やした赤いダルマの様なバケモノたちが、風船から空気が漏れ出す様な勢いで次々と飛び出していた。

そんな電波のバケモノ『電波ウィルス』たちに、影は長いヒールをカツ!と踏み鳴らし、威厳と愛嬌が入り混じった特徴的な美声で高々と名乗りをあげた。

「ヨを誰と心得る!ヨは宇宙の女王、カシオペア!否、〝カシオペア・レグナント〟であるぞ!」

赤い車輪のウィルスたちが、続々とウェーブロードに集まってくる。上下左右の光の道に集結したウィルスたちに、あっという間に影は取り囲まれた。

だが、彼女の顔に焦りはない。それどころか、不敵な笑みすら浮かべている。

「ほう、ヨの渾身の名乗りを、よもやスルーとはな。というかキサマら、何様の分際でヨを見下ろしとるんじゃ?おい、ヨは女王ぞ?ん?マジで不敬なんじゃけど」

そして、少々怒ってもいる様だった。カシオペアと名乗ったこの女性、女王の名に恥

じぬプライドの持ち主らしい。

――――そう、先程北空ミナミ少年に取り憑いた緑の閃光は、宇宙から飛来した電波生命体『カシオペア』。カシオペアはミナミの肉体と融合し、実体と電波双方の特性を併せ持った電波世界の超人、電波人間へと『電波変換』したのだ。

「ククク、そんな不敬なうつけ者どもには」

こめかみをピクつかせながら、くつくつと笑う『カシオペア・レグナント』。レグナントは嗜虐的な笑みを浮かべながら、ゆったりと右手をあげた。すると、その動きに合わせる様に、彼女の周りにかしづいていた黒い剣たちが、ふわりとその身を四方に持ち上げ、緑のエネルギーを湛える鋭い切先をウィルスたちに向けた。

この瞬間、ウィルスたちの運命は決した。

「おしおきじゃ！それゆけー！」

無邪気な声で下される、女王の判決。刹那、ウィルスたちは高速で宙を舞う八本の剣と、その切先から放たれる緑色のレーザーに蹂躙され、瞬く間にウェーブロード上から姿を消した。跡形ひとつ残らない、文字通りの全滅、消滅である。

「クク、ククククッ！アーッハッハッハッハッ！最強、最強！カシオペア・レグナント、さいきょぉーう！アーッハッハッハッハッ！」

キュッと締まった腰に両手を当てて、豪快に笑うカシオペア・レグナント。その時、彼

女の胸元に輝く赤い宝玉が、チカチカと不規則に点滅しはじめた。
『う、うーん…あれ、ボクは…ここはいったい……』
点滅に合わせて、どこか儚げな雰囲気を醸す少年の声が、ぽそぽそと宝玉から発される。胸元から聞こえてきた自分好みの幼い美声に、カシオペア・レグナントは妖艶な笑みを浮かべた。
「ようやく起きたか、我がバディよ」
『え、誰…バディって…え…?』
その声は、電波人間カシオペア・レグナントの肉体、その本来の持ち主である小学五年生の少年、北空ミナミの声だった。

第３話：降臨！お騒がせ女王（存分に騒ぐがよいぞ！）

暴走した車両群で溢れかえった午後のコダマタウン。その上空を伸びるウェーブロード上で、カシオペア・レグナントは胸元の赤い宝玉にそっと指先を添え、スリスリと愛でる様に撫でつけた。

「ククク。はじめましてじゃのう？我が半身よ」

艶のある妖しげな声で、囁く様に宝玉に語りかけるカシオペア・レグナント。それに反応して、再び宝玉がチカチカと点滅する。

『え？あ、はい、はじめまして…って、ええっ!?なにこれ、空!?お、落ちる!?』

点滅に合わせて宝玉から発せられた幼い悲鳴は、つい先程カシオペアと無理やり電波変換させられた少年、北空ミナミの声だ。

『うわ、うわっ!?』

ミナミは大混乱だった。極度の緊張と突然の電波変換で気を失い、気がついたら町の上空にいたのだ。思わずその場でバタバタと狼狽してしまう。

『あ、あれ？』

だが、ミナミの身体は全く動かなかった。普通であれば、激しく手足をバタつかせてその焦りを体現してしまうであろうこの状況において、手足はおろか、目や口すら自分の意思に反応しない。まるで腹話術か何かの様に、ただ声だけが発せられている。

「むぷぷっ！なんとまぁ初々しい反応じゃこと。まぁそう怯えるでない」

『っ!?』

すると、逆に今度は勝手に口が動いた。自分のモノであるハズの口が、自分の知らない女性の声で、自分以外の意思で喋っている。ミナミはますます混乱を極めた。

「ちゃんと立っておるじゃろう？よーく見てみよ、足場があるじゃろう。ほれ」

ミナミの身体を支配した謎の女は、宥める様な口調でそう言いながら、トントンと右足のつま先を鳴らした。

つま先から伝わる硬い感触のとおり、確かに立っている様だ。どうやら動かす事は出来なくとも、触覚は生きているらしい。

でも、ここは空だ。自分は今、空に立っているのか？

『なっ…!?』

否、ミナミの身体は、空中に張り巡らされた半透明の黄色い道、その中の一本の上に立っていた。

『なに、これ…？』

「むふふ、やはりはじめてか。この光の道はウェーブロード。電波の道じゃ」
『電波…？』
聞き慣れない単語が耳に入り…というより、自分の口から飛び出してきたミナミは、改めて周囲に広がる光の道に意識を向けた。
大小様々な広さを持つその道は、町中の建物や電子看板、電光掲示板といった、電波を扱う全てのモノから伸びており、今まさに眼下で暴走を続けている車両たちや、逃げ惑う人々のトランサーからも伸びている。それらの細い道がある程度のところで大きな一本にまとまり、更にそれらがもっと大きな一本にまとまってゆく。川の流れを三次元化した様なその構造は、まるで都市部の高速道路だ。
『すごい…』
生まれて初めて見るウェーブロードに、ミナミは思わず見入ってしまった。
自分が暮らしてきたこの町の上に、まさかこんな美しい世界が広がっていたなんて…
『…って、いやいや！』
慌てて頭を振っ…振る事は出来なかったが、ミナミは気をとりなおして女を問いただした。
『なにこれ、なんなんですか!?なんでボクがこんな…っていうかアナタ誰ですか!?ボクのカラダから出てってください！』

そう早口でまくし立てるミナミに、女はミナミの口でくつくつと笑った。
「ククク。どうどう、そういきり立つなおのこよ。激しいだけでは男が下がるぞ?」
『なっ…ふ、ふざけないでください!』
揶揄う様な女の口調に、ミナミは更に苛立ちを高めてしまう。言葉の意味はわからないが、軽んじられている事だけはわかった。
そんなミナミの必死な様子に、女はきゅんっと胸を高鳴らせた。
『…は?』
突然キュンキュンと切なく悶えだした自分の心臓。そのあまりの違和感にミナミは戸惑う。
「っはぁー!・美少年が!・ヨ好みのチョベリグ美少年が、コイヌの様にキャンキャン吠えとる!・かーっ!・かわいいのう、かわいいのう!・まっこと愛いのう、かわいいのう!・」
『っ!?・こ、この…!・』
クネクネと身悶えしながら猫撫で声をあげる女。馬鹿にされたと感じたミナミは、ぐつぐつと腹の中で怒りを沸き立たせた。
どうやら、この女から見ればミナミの怒りなどは、せいぜい小動物がじゃれついてきているくらいにしか感じられないらしい。
「よーしよしよし。いいこいいこ、いいこじゃのう〜。クククククク!・」

細長くて真っ黒な、不思議な感触のする指先で、こちょこちょとくすぐる様に胸元の宝玉を撫でる女。この時点で、その明らかに自分のモノではない黒くて大きなカタチの手に、ミナミは激しく動揺していた。

だが、それ以上にミナミを動揺させたモノがあった。女の意思と同期して向けられた視線の先、自分の胸元にあったソレを見て、ミナミは頭をカナヅチで殴られた様なショックを受けた。

『なっ!?』

小学五年生の男子である筈の自分の身体。その胸から、まるで大人の女性の様なふたつのふくらみが生えていたのだ。

『なにコレ!?』

黒く艶めくタイトなボディスーツに包まれた、形の良いたわわな果実。

よく見れば手や胸だけでなく、細長いブーツの様な脚の装甲や、カラダの周りに浮かんでいる謎の黒い剣たちなど、とにかく全身がおかしな事になっている。だが、男子としてこの世に生を受けた北空ミナミ少年は、絶対に自分に備わっているハズのないその豊かな双丘に、雷に撃たれた様な衝撃を受けてしまっていた。

『な、な、なんで!?ボク、おと、おとこなのに!?こ、これ、おっ、おっ……!?』

オロオロと目を泳がせながら、あんぐりと口を開けるミナミ…の精神。

「ぷっ、ぷふっ！ぷふふふふっ！」

自分――正しくはミナミのだが――の肢体に釘付けになってしまっている少年に、女は愉しげな笑い声をぷふふと漏らす。

そして女は、おもむろに両手を自分の豊かなふくらみに伸ばし、もみゅっ、もみゅっ、と、下から持ちあげる様な手つきで妖しく揉みしだきはじめた。

「んっ♪コレ、気になるか？ん？」

『ぎゃーッ!?』

両手いっぱい、指の隙間にまで満遍なく広がる、水風船の様なやわらかさ。あまりに刺激的なその感触に、幼いミナミの精神は悲鳴をあげて飛び上がった。もし彼の身体が普段どおりだったなら、きっと熱した鉄の様に真っ赤な顔になっていたことだろう。

『だ、だめっ！だめだよ、はなしてっ!?』

「ん～？よいのか～？はなしてよいのか～？んん～？」

『ひぃっ!?い、いいよ！はなしていいよ！やだ、やだ！もうやだからぁ!?』

「ぷふっ、ぷっは！アッハッハッハッ！ウブじゃウブじゃ、ウブじゃのう♪ぷふはははは！」

半狂乱で泣きわめくミナミに、女はお腹を抱えてケラケラと笑った。その場にペタンと腰を下ろし、長く伸びた黒い両脚を楽しそうにパタパタさせている。声や話し方は大

人なのに、まるで子どもの様な仕草だ。
『うぅ…もう、なんなんだよぉ…』
弄ばれたミナミの精神は、完全に涙目状態になってしまった。普段の歳不相応に大人びた態度など、もはや見る影もない。
ボク、いったいどうなっちゃったの…？なんでカラダがヘンなことに…？
っていうか、そもそもこの女の人だれ…？なんでボクのナカにいるの…？
それに、電波とか、ウェーブロードとか…もう、わけわかんないよ…
「…むむっ！そうじゃ、いかんいかん！のんきにおしゃべりしてる場合ではなかったわ！これ、おのこよ！」
『はい、なんでしょう…』
思い出した様に慌ててミナミのカラダを立ち上げた女に、ミナミは消沈した声で返事を返した。理解不能な展開の連続に、少年の心と頭はほとんどパンク状態だった。
「ヨの名前はカシオペア！宇宙一イケイケでゴイスーかつアルティメットな、スーパーつよつよ女王カシオペア様じゃ！おのこよ、オヌシ名をなんと申す？」
ウェーブロードに仁王立ちし、胸元の宝玉に目を向けながら、ミナミの口でペラペラと自己紹介をする女。
どうやら、彼女はカシオペアという名前で、女王様で、宇宙一イケイケでゴイスーで、

かつアルティメットらしい。あと、つよつよ?

『ミナミです。北空ミナミ…』

もう、ミナミは考えることをやめた。これ以上頭に余計な負荷をかけたら、いよいよ頭がバクハツしてしまう。

カシオペアでも北斗星でもなんでもいい。とにかく早く解放してほしい。その一心だった。

「ミナミ、ミナミか。うむ、実によい名じゃ。オヌシにぴったりの響きじゃな。よぅし、ではミナミよ、アレを見よ」

満足げに頷き、ニッコリと笑うカシオペア。彼女の視線――ミナミの視線は、胸元から眼下の町へと移っていた。依然として暴走車たちが暴れ回っているミナミの町、コダマタウンへと。

「あの惨状、止めに参るぞ」

『…とめる?』

カシオペアの言葉に、ミナミの精神は首を傾げた。

あのクルマたちの暴走は、きっと悪い電波ウィルスたちのせいだ。今ニホンの各地で、ウィルスが原因不明の大量発生を起こしていると、毎日の様にニュースで流れている。そのニュース映像の中に、ちょうどこんな暴走事故の映像も含まれていた。

そんな、サテラポリスですら手間取る様な難儀な状況を、止めにいく？
『無理ですよ、潰されちゃいますよ？カシオペアさん』
「敬語はいらぬ。楽にせよ、我がバディ」
『…バディ？』
「相棒という意味じゃ。ヨとオヌシは一心同体、ヨあるところにオヌシあり。ヨとオヌシ二人のチカラで、あそこに蔓延る雑菌どもに誅を下してくれようぞ」
『……』
自信たっぷりなカシオペアの言葉に、数秒間沈黙するミナミ。
『…は、はあっ!?』
意味を理解したミナミの精神は、ぶんぶんと首を左右に振った。
『イヤだよ、死んじゃうよ！やるなら一人でやってよ、強いんでしょ!?』
「いいやミナミよ、一人ではダメじゃ」
カシオペアは動じない。眼下の町を不敵に見下ろしながら、静かに、しかし力強くミナミを論する。
「ヨ一人のチカラでは、あまりに時間がかかり過ぎる。今必要なのは電波女王カシオペアではなく、電波人間カシオペア・レグナントの力なのじゃ」
『で、でんぱにんげん？レグナ、なに？』

またもや飛び出してきた未知の単語に、思わず聞き返してしまうミナミ。
電波の道の次は、電波人間だって…？
「今の我らの状態のことじゃ！ほれ、とにかく急ぐぞ！女王ジャンプッ！」
『うわっ!?』
混乱するミナミの精神を置いてけぼりにして、カシオペア・レグナントは素早くウェーブロードから跳躍した。
風の様な速さで空を飛ぶレグナントは、暴走車で溢れかえる交差点の直上でピタリと急停止し、そのままふわりと宙に浮遊した。突然の急発進と急停止に、ミナミの精神は目を回してしまう。
「よいかミナミよ！」
ふらふらのミナミに構わず、カシオペア・レグナントは両手を指揮者の様にサッと振り上げた。
すると、レグナントの周囲にかしづいていた八歩の黒剣が、ジャキッ！と鋭く眼下の交差点に切先を向け、刀身から緑色のエネルギーを発しはじめた。
「セミナーじゃ！電波ウィルスを最も手っ取り早く、かつ確実に駆除するその方法！オヌシに見せてくれようぞ！」
『え、え、え？』

状況についていけないミナミは、オロオロと問い返す事しか出来ない。
カシオペア・レグナントは、ニヤリと好戦的な笑みを深めながら、素早く両手を振り下ろし、叫んだ。
「こうするのじゃ！ゆけぇい！”プライドワインダー”ッ！」
女王の命に従い、八本の剣が矢の様な速さで道路上へと射出される。
その瞬間、地獄の様相を呈していたコダマタウンは、更なる地獄と化した。
『なっ!?』
レグナントが放った八歩の黒剣『プライドワインダー』たちが、まるで意思を持つかの様に高速で道路上を飛び回り、暴走する車両たちに緑色のレーザーを次々と発射しはじめたのだ。
眼下の交差点から町中に広がりつつあった何十台もの暴走車たちが、細く鋭いレーザーにメインモーターかホバーモジュールを的確に撃ち抜かれ、次々と横転していく。大型バスやトラックが他の乗用車を巻き込みながら歩道に乗り上げ、道路沿いの民家や商店の壁と大激突を起こした。
それだけではない。車両を貫通したプライドワインダーのレーザーが、アスファルトに着弾した瞬間小さな爆破を起こしているのだ。突然の爆発音と火の気配に、逃げ遅れていた人々の更なる悲鳴があがる。

『や、やめて！やめてよカシオペア！なんでこんな!?』

自分のカラダを操っているカシオペアが起こした突然の凶行に、ミナミは必死な声で制止を呼びかけた。

だが、カシオペア・レグナントは止まらない。

「まあ聞けミナミよ！よいか？電波ウィルスとは、要はマシンに入って悪さするのが大好きな連中なのじゃ。なれば！」

高慢な笑顔で朗々と語りながら、レグナントは両手を腰に当てた。

「マシンそのものをぶっ壊せばよいのじゃ！さすればヤツらはマシンの外へと出て来ざるを得んからのう！して、出てきたところをヨのワインダーで一網打尽にしてやれば、これにて解決万事オケまる！これが女王流ウィルスバスティングじゃ！むっふっふ、どうじゃどうじゃ？ミナミどうじゃ？うんと褒めてくれてよいのじゃぞ？ん？」

ドッカンドッカンと派手な破壊を繰り広げながら、そう無邪気に笑ってみせるカシオペア・レグナント。

あまりにズレた彼女の感覚と、そんな彼女に操られている自分のカラダ、そして、そこに宿る強大で危険なチカラ。

『――――』

ミナミは、絶句して何も言えなくなってしまった。

約十年のミナミの人生で、初めて感じる不思議で不快で不毛な感情。

『――――』

ドン引き。北空ミナミは、宇宙の女王カシオペアに心の底からドン引きした。

ミナミは願った。誰か助けて、もうやだこの人、と。

――――そんなミナミの願いを、『流れ星』は聞き届けた。

「ロックバスター！」

「背中痛ァッ!?」

青い流星の戦士が、左手に生えた青いケモノの口から、桃色に光るエネルギー弾を素早く連射し、迷惑女王の背中をバスバスとしばきあげたのだ。

「いっっっった!?ちょ、ハァ!?なんじゃ今の、くっそ痛いんじゃけど!?」

背後からの奇襲という不敬の極みにブチギレた女王は、黒いヘッドギアに隠れた額にビキビキと極太の血管を浮かべ、町に散らばっていた八本のプライドワインダーを一瞬で呼び戻した。

「ク、ククク、ククククー！おうおう誰じゃ！この痴れ者大明神が！ヨのかよわい背中をバッシバシ撃ちまくるとか、よほど夜空の星になりたいようじゃなァ!?オォン!?」

スカートの裾の様にワインダーを広げながら、鬼の形相で背後を振り向くカシオペア・レグナント。射殺す様なその視線の先には、ヒロイックなアーマーに身を包んだ、小

さな青い戦士の姿があった。

第４話：ロックマン・オン・エア（またしてもヨの出番が!?）

『スバル、おいスバル！』

放課後の掃除当番を終え、育田先生の科学実験に参加しようと教室を出たスバルは、突然ガタガタと震え出した自分の左腕におや？と足を止めた。

「ロック？」

一応軽く周りを見回してから、左腕の青いトランサーを開く。通常であればメインメニューが表示される筈のその画面には、彼のトランサーに住み着いている、青い電波生命体の姿があった。

『スバル』

足の無いオオカミ男といった風貌の、気性の荒い宇宙人。星河スバルの相棒、ウォーロックだ。

『学校を出るぞ。なにか妙な電波を感じやがる』

「えっ…」

普段通り荒々しい口調のウォーロック。しかし、いつになく神妙な様子でもある。スバルの胸にざわりとイヤな緊張が走った。
「…ウィルスじゃなくて?」
廊下の端に移動しながら、小声でトランサーに囁くスバル。側から見れば、友達と通話をしている普通の小学生にしか見えない。
ウォーロックは、薄いディスプレイの中で小さく肯首した。
『あぁ。この電波強度、ウィルスやジャミンガーなんか比にならねぇ。間違いなく電波人間だ』
「なんだって!?で、でももうFM星人は」
『へっ、血の気の多いヤツらのことだ。残党の一人や二人くらいはいるだろうよ』
「そんな…」
FM星人。電波の身体に残忍な精神を宿らせた、好戦的な宇宙人たち。彼らはFM星王ケフェウスの命令により、スバルたちが住む地球を破壊しようと様々な悪事を働いた。
彼らの侵略行為に対して、スバルとウォーロックは力を合わせて立ち向かった。人間と電波生命体が融合した正義の電波人間、『ロックマン』として。
ある日突然出会った二人は、様々な紆余曲折を経て共に戦う相棒となり、ロックマン

となった。
　時に迷い、時に躊躇い、時に傷つけ合いながら。ロックマンとなったスバルとウォーロックは、仲間たちと紡いだキズナのチカラで、見事ＦＭプラネットの地球侵略を止めさせた。星の支配者たる星王ケフェウスと和解し、彼とキズナを結ぶ事によって。
「もう、戦いは終わったのに…」
　争いを好まないスバルの顔が、悲しげに曇る。
　そう、彼らとの戦いは、もう終わった。終わった筈なのだ。
『…だから行くんだろ、俺たちが』
　そんな優しい彼に喝を入れるのも、ウォーロックの役目だ。
『ソイツが誰かなんざどうだっていい。みんなの町でバカ騒ぎしてるバカがいんなら、ぶん殴ってでもソイツを止めて、みんなを守る。それが俺たち”ロックマン”だ。ちがうか？』
　ウォーロックの赤い瞳が、スバルの胸に眠る強さと熱さに火を点ける。
　――そうだ、ボクは守りたい。みんなを、友達を、家族を、ブラザーを。
『守ろうぜ、スバル。俺たちが守ったこの町を、この星をよ』
「…うん！」
　力強く頷いたスバルの瞳には、明るい光と確かな熱が宿っていた。

誰かを守りたい。その想いを原動力に、星河スバルは流星となる。

◇

矢の様に学校を飛び出し、ウォーロックの感知能力が示す先へと駆けつけたスバル。そこで目にしたのは、正に地獄と言うべき破壊と悲鳴の嵐だった。

「これって…!?」

『ひでぇな…!』

暴走したクルマたちが、コダマタウンの道路という道路でピンボールの様に跳ね回っている。破壊された消火栓が間欠泉の様に水を吹き散らし、へし折れた電子看板がバチバチと火花を飛ばしている。歩道には逃げ遅れた人々がひしめき、目前に迫るくろがねの暴威に慄いていた。

助けを求める人々の、悲痛な叫びが耳をうつ。スバルの中で、カチリと何かが切り替わった。

『妙な気配は後回しだ、いくぞスバル!』

「うん!」

少年から戦士の顔へと変わったスバルは、ウォーロックが宿る左腕を高らかに掲げ

た。この惨状から人々を、みんなを救う為に。

「電波変換！星河スバル、オン・エア!!」

瞬間、スバルの小さな身体は地上から姿を消し、人間の目には見えない青い戦士が、眩い緑の輝きと共に、颯爽と宙に飛び出した。

「バトルカード、プレデーション！」

空中で鮮やかに身を捻りながら、一枚のカードを眼前に放る戦士。

『捕食（プレデーション）！』

戦士の左手に生えたケモノの生首が、放られた『バトルカード』を素早く捕食し、戦士の身体にデータを取り込んでゆく。データは一瞬で戦士の身体にインストールされ、彼に超常の力を与えた。

「グラビティステージ！」

暴走バスのルーフに片膝を突いて着地した戦士が、開いた右手を勢いよくルーフに叩きつける。すると、彼が乗るバスと周囲のクルマたちに、凄まじい高重力が発生した。

ホバー装置が耐えきれなくなる程に車体重量が激増したクルマたちが、ズンッ！と重い音をたててアスファルトに埋まっていく。歩道で身動きが取れずにいた人々は、突然道路にめり込んで動かなくなった暴走車たちに困惑しながらも、すぐさまその場から逃げ出していった。

自分たちを危機から救った青い戦士の姿を、彼らは知らない。何故なら戦士は、不可視の電波で肉体を構成された電波世界の超人、『電波人間』だからだ。

彼の名は『ロックマン』。星河スバルとウォーロックが電波変換する事で誕生する、ふたりでひとりの電波人間だ。

『スバル！』

「わかってる！」

道路上のクルマたちをその場に縫い付けたロックマンは、青いアーマーに包まれた小さな身体を緑色の閃光へと変え、瞬時に道路中を駆け巡った。

「助けるんだ、みんなを！」

自身の『周波数』を変化させ、超高速の流星となったロックマンは、クルマに閉じ込められてしまった何人ものドライバーや同乗者たちを、瞬く間に救出していった。

電波で出来たカラダの特性を利用し、クルマのドアやフロントガラスをケムリの様にすりぬけ、車内の人々を特殊な変換能力で一時的に電波体へと変化させ救出、建物の屋根などの安全地帯へと素早く避難させる。

この一連の救出作業を、ロックマンはものの数秒で完遂させた。ＦＭ星人との戦いで多くの経験を積み、その能力と特性をひたむきに磨きあげていった彼らだからこそ出来る、鮮やかな救出劇である。

しかし、そんなロックマンの勇姿を認識できる者は、このストリートには一人もいない。

「へ…」

「なにが…?」

救出された人々は、生還を喜ぶ事もせずポカンと口を開けて呆けていたが、それも無理からぬ事だ。

電波人間は不可視の存在だ。自分で『見せよう』『見せてもいい』と周波数の調節でもしない限り、普通の人間では見る事が出来ない。

そんな不可視の何者かが、目にも止まらぬ超高速で動いていたのだ。ロックマンに助けられた事など、彼らには『暴走したクルマの中から突然外へと瞬間移動していた』、としか認識できていなかった。

「よし、あとはウィルスを!」

人々を避難させたロックマンは、『グラビティステージ』の効果が切れて再び動き出したクルマたちに向け、赤いバイザーに覆われた、幼くも凛々しい瞳をキッと尖らせた。

クルマを暴走させている電波ウィルスは、車体の制御を司るメインコンピューターの電脳に潜んでいる筈。そこに飛び込みウィルスを直接デリートする事で、初めてこの惨劇は終息するのだ。

だが、ロックマンの左手に生えたケモノの生首、ウォーロックは、早速バスの電脳に飛び込もうと勇むスバルに、鋭く意を唱えた。
『ダメだスバル、それじゃキリがねぇ!』
「え?」
ウォーロックの強い口調に、スバルは何事かと左手を見下ろした。
ウォーロックは、ある程度自分の自由に動かせるロックマンの左腕をぐっと上向かせ、スバルに視野の拡大を促した。
『こんだけの台数が暴れてんだぞ!?チンタラやってちゃ町が潰れる!』
荒々しい口調で怒鳴りながら、パペットの様にバクバクと口を動かすウォーロック。彼の鼻先が示す先は、今彼らが立っている道路から少し離れた交差点。
「あぁ…!?」
その交差点でも、そして、更にその先の交差点でも。大小のクルマたちが、暴れ馬の様に激しくその身を周囲に叩きつけている。
「くっ…!」
苦々しく歯噛みするスバル。ウォーロックの言う通りだ。このまま一台一台丁寧にウィルスバスティングしていく猶予なんて、ある訳がない。
『こうなったら、ウィルスを無理やり追い出すしかねぇ!やれ、スバル!』

「クルマを壊せってこと!?」
『迷ってるヒマがあるか!?』
躊躇するスバルに、ウォーロックはすぐさま怒鳴り返した。
『中のヤツらは助ける、だがその後はぶっ壊せ！さっさとやらなきゃみんな死ぬぞ！』
「っ…！」
その言葉に、マシンの破壊を嫌うスバルはぐっと息を呑む。
だが、スバルの中に存在する戦士としての使命感が、その躊躇を乗り越えさせた。
「…わかった、やろう！町を救うんだ！」
迷いを捨てたロックマンは、僅かに残った躊躇いすら振りきる様に、素早くその場から跳躍した。
そのまま左腕を真っ直ぐに構え、再び暴走を始めたクルマたちに狙いを定める。
「ロックバスター！」
構えた左腕の先、大きく開いたウォーロックの口から、桃色のエネルギー弾が次々と発射された。電波人間ロックマンの主武装、その名も『ロックバスター』だ。
空中から放たれたロックバスターは、狙った的を外さず的確にクルマたちに着弾し、頑丈なボディを容易く破壊していった。
『くるぞ！』

「うん！」

手近なウェーブロードに降り立ったロックマンの元に、赤く燃えるずんぐりした影の大群が殺到してくる。クルマの残骸から飛び出してきた、問題の電波ウィルスたちだ。

このウィルスたちの名は『モエローダー』。ダルマの様な大型の上半身と一輪車の様な下半身を持つ、燃え盛る炎を纏った灼熱の電波ウィルスだ。

そんな危険なウィルスたちが、さながら暴走族の様に群を成し、ロックマンの小さな身体を轢き潰そうと、燃える車輪を唸らせ襲いかかってくる。

「バトルカード、プレデーション！」

そんな恐ろしい軍勢に、ロックマンは怯む事なく立ち向かっていく。

「ネバーレイン！」

ウォーロックにカードを捕食させたロックマンが、鋭く右手を天に掲げ、振り下ろす。

すると、ロックマンの前方に迫っていたモエローダーたちに、凄まじい破壊力を伴った光の豪雨が降り注いだ。

水色のエネルギーで構成された破壊の飛沫の猛威にさらされ、次々とデリートされていくモエローダーたち。何十体といた炎のウィルスたちは、あっという間に数える程の数になった。

そんな生き残りたちに、ロックマンは風を突きぬけて飛び込んでいく。

「バトルカード！」
『捕食（プレデーション）！』
新たに放られたバトルカードを、左手を振りかぶる様にして捕食するウォーロック。
斜めに掲げたケモノの頭が、一瞬にして青い剣へと姿を変える。
「スイゲツザン！」
水のエネルギーを宿した鋭い刃が振り下ろされ、生き残りのうちの一体が、真っ二つに両断された。
剣を振り抜いたロックマンは、その勢いの導くままに、駆け抜ける様に敵を斬り裂いていく。
「やぁぁッ！」
まだ幼さの残る少年の雄叫びが、ウェーブロードに木霊する。
「えぇぃッ!!」
さながら自らも激流と化したかの様に、怒涛の斬撃を浴びせかけるロックマン。
襲いくる青い剣戟の波に飲み込まれ、モエローダーたちは瞬く間に全滅した。
「オールデリート！」
『次だ！』
「うん！」

全てのウィルスを切り捨てたロックマンは、次の暴走車群に狙いを定め、滑る様にウェーブロードを駆けた。
「いくよロックー」
『おうよ!』
一瞬で次の交差点に辿り着いたロックマンが、再び車内の人々を助け出そうと周波数を変える。
だがその時、スバルたちの目の前で、信じられない事が起きた。
「あぁっ!?」
『なんだ!?』
今まさに飛び込もうとしていた軽自動車が、突然天から放たれた緑色のレーザーに車体を射抜かれ、小さな爆破と共に勢いよく横転したのだ。
「――ッ!」
考えるよりも早く、ロックマンは動いていた。周波数を限界ギリギリまで高め、緑の閃光となって道路中のクルマたちの間を縦横無尽に飛び交い、車内の人々を解放していく。
だが、その間にも件のレーザーは無慈悲にクルマたちに降り注ぎ、人々と町に少なくない被害を与え続けていた。

『急げスバル！あの攻撃は電波人間だ！』
「わかってるッ！」
　多分に焦りを含んだ声で叫びながらも、ロックマンの動きは正確さを欠かなかった。誰一人としてその命を散らさせる事なく、全ての人々を救出したのだ。
　何度となく臨んできた、ＦＭ星人たちとの命懸けの戦いの数々。そこで培ってきた強靭な精神力と冷静な判断力が功を成した、まさに奇跡の業だった。
「なんてひどいことをするんだ…！」
『バカッ！ウィルスがくるぞ！』
「はっ!?」
　だが、それでもスバルはまだ子どもだ。成功の後にはどうしても隙が生まれてしまう。謎の敵が犯した所業への憤りも相まって、ロックマンは降り立ったウェーブロードで棒立ちになってしまった。
　そんな隙だらけの小さな戦士に、破壊された車両群から飛び出してきたモエローダーたちが容赦なく襲いかかる。
「ぐあっ!?」
　モエローダーたちの突進を躱しきれず、ウェーブロードから叩き落とされてしまうロックマン。

『チッ！』
動揺を隠せないスバルに代わり、ウォーロックがロックマンの周波数を変化させた。
通常より更に非物質性を高めたロックマンの身体が、落下先に建つ民家の壁をスルリとすりぬける。ロックマンは慌てて周囲に感覚を走らせ、民家の庭に設置されていた電波望遠鏡から伸びる細いウェーブロードに掴まり、腕力にモノを言わせて無理やり登り立った。
「ありが…」
『シャンとしろッ！』
「ご、ごめん！」
ウォーロックの一喝に少々萎縮しながら、スバルは上空から大挙してくるウィルスたちをキッと睨みつけた。
「バトルカード、プレデーション！」
ロックマンは新たなカードを頭上に放り、同時に自身もその場からジャンプした。
矢の様に天へと登りながら、殴りつける様な勢いでカードを捕食するウォーロック。カードに組み込まれたデータがロックマンにインストールされ、ウォーロックの頭は平たい発射口を備えた特徴的な砲身へと変わった。
「ワイドウェーブ！」

上空から押し寄せる赤い軍勢に対し、幅広の砲で敢然と立ち向かうロックマン。
「いっけぇ!」
構えた砲口から『ワイドウェーブ』を発射しようと、ぐっと腕に力を込めるスバル。
だがその時、またしてもあの緑のレーザーが空に瞬いた。
「えっ!?」
細く鋭いレーザーが、二本、三本、四本と、続けざまにモエローダーたちの大軍に襲いかかる。
もはや、スバルが砲を放つ必要などなかった。赤い軍勢は四方から降り注ぐ緑色の殺意に焼き尽くされ、電波の残りカスとなって宙に溶けていった。
「どうなって…」
ジャンプした先のウェーブロードに着地したロックマンが、今まさにウィルスたちが焼き払われた辺りを見下ろす。
その時、スバルとウォーロックは気づいた。コダマタウンの上空に散らばる、緑色のエネルギーを湛えた黒い剣たちの姿に。
一、二、三、四…少なくとも五本以上はある謎の黒剣は、町の上空をヒュンヒュンと高速で飛び交い、標的となる暴走車両を見つけては、切先から放つ緑のレーザーで無慈悲に破壊していた。

「アレだよロック、あの剣だ！」
『まかせろ！』
ウォーロックは剣に意識を集中させ、その周波数と近い電波を放つ、何か大きな気配のする謎の敵の居場所を探った。ケモノの要素を強くその身に宿したウォーロックが持つ、彼の得意技だ。
『こっちだ！』
「よしっ！」
ロックマンは左手をナビ代わりにして前方に掲げ、ウォーロックが見つけた敵の元へ全速力で急行した。
周囲の景色が一瞬で塗り変わり、瞬間移動さながらの速度で目的地に辿り着いたスバルたち。そこで彼らが目にしたのは、見た事もない新たな電波人間の背中だった。
「――、――――！」
全体的に黒っぽい姿の、スラリと背の高い人影が、空中に浮遊しながら何やら独り言を喋っている。距離が空いている為よく聞こえないが、妙にウキウキと弾んだ楽しげな声だ。
破壊音と悲鳴に溢れた町を見下ろしながら、ケラケラと無邪気に笑うその様は、まるで悪事を楽しんでいるかの様だ。

「アイツが町を…！」
　スバルはギリリと歯を食いしばり、その黒い背中に左腕を真っ直ぐ構えた。ロックバスターの構えだ。
『な……』
　だが、そのロックバスターを吐き出す肝心要のウォーロックの様子が、どこかおかしい。獰猛な青い口をあんぐりと開き、赤い両目をこれでもかと見開いている。明らかに動揺した様子だ。
「ロック?」
　そんな相棒の様子を、スバルは訝しんだ。
　どんな時でも勇猛果敢で、時に野蛮とすら言えるほど気性が荒く乱暴なウォーロック。そんな彼が、いったい何にそこまで動揺しているのか。
『ま、まさか、そんな…いや、そんなハズはねぇ…ヤツは、ヤツはもう、とっくのむかしにくたばって…だ、だがアレは…あの周波数に、あの声だって…だが、だとしたらどうして……』
「ロック、ロック?大丈夫?ロック!!」
『ッ!?あ、あぁ。わりぃな、なんでもねぇよ』
　左手のウォーロックが、気を取り直す様に頭を左右に振っている。なんでもないなん

て言っているが、どう見てもそんな事はなさそうな仕草だ。
『おら、何ボサっとしてんだ！アイツを止めるぞ、スバル！』
「う、うん…よし…！」
　気にはなったが、今はあの電波人間の悪事を止める事が先決だ。スバルは意識を切り替えて、左腕をぐっと構え直し、叫んだ。
「ロックバスター！」
　勇ましいスバルの声と共に、ウォーロックの口からバスターが連続で吐き出される。
　発射された何発ものエネルギー弾は、狙いを違わず黒い背中に全弾命中し、空中で小さな爆発を起こした。
「背中痛ァッ!?」
　突然背後から奇襲を受けた黒い電波人間が、どこか間の抜けた響きの悲鳴をあげて身を捩る。
「いっっっった!?ちょ、ハァ!?なんじゃ今の、くっそ痛いんじゃけど!?」
　ギャーギャーと大声で泣き喚く女の声が、スバルとウォーロックの耳に飛び込んでくる。ウォーロックは思わず息を呑みそうになり、寸でのところで堪えた。
「ク、ククク、ククククー！おうおう誰じゃ！この痴れ者大明神が！ヨのかよわい背中をバッシバシ撃ちまくるとか、よほど夜空の星になりたいようじゃなァ!?オォン!?」

怒りに肩を震わせながらスバルたちのいる背後へと振り返った女が、喧しくもどこか憎めない不思議な声でキャンキャンと吠える。そんな女の周囲には、先ほど町で猛威を振るっていたあの黒い剣たちが、シュンッと空間転移でもしたかの様に顕現していた。

黒装束に身を包んだ女にかしづく、八本の黒剣。それは女の腰から生えた黒い翼の様で、女を高貴に着飾るロングドレスの様にも見えた。

「そこから降りろ！ＦＭ星人！」

「は？はむそーせーじ？なんじゃキサマ、最近流行りの腹ペコ系か？あいにく物乞いなら間に合っておるわ。ほれ、シッシッ！」

高慢な声で間抜けな発言をぶちかます謎の女に、スバルは思わずずっこけてしまう。

そんな中、ウォーロックはスバルにも聞こえないほど小さな声で、決心を固める様に一人呟くのだった。

『そうだ、とにかくアイツを止めてやる…聞きてぇ事もあるしな…！』

第５話：女王の挽回!?（ごめんなさいなのじゃ！）

「この痴れ者大明神が！ヨのかよわい背中をバッシバシ撃ちまくるとか、よほど夜空の星になりたいようじゃなァ!?オォン!?」

グリーンの瞳に怒りの炎を燃やしながら、眼下のウェーブロードに立つ青い戦士をチンピラじみた形相で威嚇するカシオペア・レグナント。

『うわぁ……』

品性のカケラもなくメンチを切る自称女王の姿に再度ドン引きしつつ、ミナミは件の戦士に意識を向けた。電波変換によって強化された超視力が、眼下の戦士の全貌を鮮明に捉えてゆく。

『え…こ、こども……？』

此方に向かって勇ましく左腕を構える、小さく細いシルエット。身長はぱっと見、本来のミナミより少し低いくらいしかない。そんな小さな少年が、濃紺のボディスーツの上に青いアーマーを纏い、頭には青いヘッドギアを装着して、女型の怪人となった自分

と対峙している。

そんな、一見幼く頼りない大きさの戦士だが、ミナミには彼が自分と同じ小さな子どもとはまるで感じられなかった。

眼だ。ヘッドギアと一体化した赤いバイザーに覆われた、未だあどけなさを残す大きな両眼。その眼に宿った凛々しく力強い意志の光が、彼の存在を一回りも二回りも大きく、タフに見せていた。子どもだなんてとんでもない、明らかに歴戦の戦士のオーラだ。

特筆する点はまだある。その戦士が構える左腕、その先に生えた左手のカタチだ。彼の左手首からは、普通の人間の手とはまるで違う、青いケモノの生首が生えていた。

『イヌ……?』

一見パペット人形の様にも見える、猟犬の如きケモノの頭が、鋭い形状の赤い瞳に攻撃的な色を宿らせ、ギロリとミナミを睨む。

『……っ!?』

戦士の凛々しさとはまた違う、獰猛で荒々しい威圧感。ミナミの精神はヒュッと息を呑んだ。

「そこから降りろ！ＦＭ星人！」

油断なく左手を構えた青い戦士が、声変わり前の高い声で勇ましく叫ぶ。やはり彼はミナミと同じ歳ごろの少年の様だ。

『え、えふえむ…？』

少年が放った単語の意味が、ミナミにはまるでわからない。降りろというのは空から降りろという事だろうが、えふえむ、なに…？

「は？はむそーせーじ？」

呆けた声でほげ～っと返すカシオペア。ミナミの精神は思わずずっこけた。

「は、はぁ？」

見ると、青い戦士もウェーブロードでずるっとずっこけていた。困り顔で此方を見上げる小さな戦士のちょっぴり気の抜けた姿に、ミナミは場違いながら少しだけ親近感を覚えた。

うん、わかるよ、青い誰かさん。このカシオペアってヒト、ホントわけわかんなくてアホなんだ。

呆れ返るミナミに構わず、カシオペアは優雅に腕を組んで戦士を見下ろした。

「なんじゃキサマ、最近流行りの腹ペコ系か？」

胡乱な目を戦士に向けたカシオペアは、どこか小馬鹿にした様な態度で右手をヒラヒラさせた。

「あいにく物乞いなら間に合っておるわ。ほれ、シッシッ！」

あっちいけ！と馬鹿馬鹿しげに手を振るカシオペア・レグナント。どうやら彼女に

は、己こそがこの場で一番馬鹿馬鹿しい存在であるという自覚が無いらしい。
「な、なんか…変なヤツだね…？」
『油断するなスバル、アイツのチカラはホンモノだ……しかしあそこまでアホなオンナだったか……？』
「え？」
『なんでもねぇよ』
　困惑した様子で何事か囁き合う戦士とケモノ。バクバクと口を動かす小さな頭と言葉を交わす様は、まるで腹話術師の一人芝居だ。
「ふん、ヨを無視してこそこそナイショばなしとは、なんたる不敬か。じゃが――――」
　カシオペア・レグナントは、異形の左手を持つ戦士からくるりと背を向け、スッと身体を上空へと浮上させた。
「よろこべ小僧。今ヨは清く正しい慈善活動に忙しくてな、キサマに構っているヒマなど無いのじゃ。よってこの場は見逃してやる。どこぞへ去ねよ、ヨの寛大さに涙しながらな」
「なっ、待てっ!?」
　尊大に言い放ったレグナントは、ジャンプして追い縋ってくる戦士を華麗にスルーして、ふわりと両手を掲げた。オーケストラの指揮者の様な、優美で荘厳な『あの動き』だ。

『あっ…!?』

ミナミが気づいた時には、もう遅かった。ニヤリと笑ったレグナントが、サッと両手を振り下ろし、楽しげな声で高らかに叫んだのだ。

「プライドワインダーー!それゆけーッー!」

瞬間、レグナントにかしづいていた八本の黒剣『プライドワインダー』たちが、再び町中に散らばっていった。放たれた黒剣たちが、目にも止まらぬ速さでコダマタウン上空を飛び交い、生き残りの暴走車たちに狙いを定めていゆく。

『あのヤロウまたッ!?』

「ロック!!」

『おうッ!!』

焦りを孕んだ戦士たちの声が下から聞こえてくる中、ミナミはカシオペアに必死に呼びかけた。町の破壊を止めさせる為に。

『カシオペア、カシオペアっ!』

ミナミの声に合わせて、カシオペア・レグナントの胸元に光る赤い宝玉が、ビカビカと激しく点滅する。どうやらミナミの意志に呼応して、宝玉は光量を増すらしい。

ミナミの声に気づいたレグナントは、胸元を見やってふにゃぁ〜っと頬を緩めた。その小動物を見る様な態度に、ミナミの精神はビキリと青筋をたてる。

「んん～?ミナミどうしたぁ?かように切羽詰まった声でぇ、ヨの名前をチュンチュンチュンチュン繰り返してぇ?あっ、よもやヨの美貌と美技にぃ、早くもメロメ…」
『違うよ!このおバカッ!』
「おバカ!?」
　突然の罵倒にビシリと固まる女王。女王はヒクヒクと頬を引き攣らせながら、胸の玉をぐりぐりと指でつねった。
「これっ!言うに事欠いてバカとはなんじゃバカとは!?悪いコト言うのはこの口か!?ん!?」
　子どもを叱りつける様な口調のカシオペアに、ミナミは更に噛みついていく。
『口ならキミに盗られてるよ!いいから下を見て!』
「なっ、ヨに指図するか!?」
　普段静かな人間は、一度怒るとなかなか止まらない。その例に漏れずミナミはガミガミとカシオペアに食らいついていくが、彼女もまた譲らない。キッと形のいい眉を怒らせ、点滅する宝玉をペチッ!と叩く。
「えぇい、弁えんか!このプリティ小童が!いかにヨのバディと言えど、女王たるヨに命令する事など断じて許さぬ!この騒ぎが収まったら、きっちり処すから覚悟しておれよ!?ヨが手ずからおしりぺんぺん百叩きの刑に処して――――」

『い・い・か・ら下ッ!!』
「ぬほっ!?」
ミナミの怒号と同期して、カシオペア・レグナントの身体がガクンッ!と前のめりになる。
「なん、じゃと…ッ!?」
脚をピンと伸ばしたまま、強制的に腰を直角に曲げさせられた女王。齢幾歳も数えぬかよわい少年に、一瞬とはいえ肉体の支配権を奪われたその事実は、彼女に大きな衝撃与えた。
「よ、よもや…!?こ、このヨが…女王たるこのカシオペアが、あろうことか腰を折らされるか!?おのれミナミ、なんと恐ろしい子…ッ!」
最敬礼の姿勢のまま、驚愕と屈辱にワナワナと震えるレグナント。だが一方で、彼女はミナミの精神が見せた意外な爆発力に心底関心してもいた。このミナミとやら、ただ見目麗しいだけの美少年というワケではないらしい。
「ク、ククク、ククク…ミナミ、ミナミ、北空ミナミ、か。ヨと周波数がピッタリなだけでなく、かような強情さと反骨心まで持ち合わせておるとはな…むふっ、むふふっ!いやはや、なかなかどうして、面白い……!」
『ふう、ふう、え……?』

声には出さず、口の中でぶつぶつと呟く女王に、依然怒りながらも怪訝な顔をするミナミの精神。

カシオペアは、ニヤリと不敵な笑みを白いかんばせに浮かべながら、先ほどとは打って変わった静かな声色で口を開いた。

「…ふぅ、してミナミよ?下と言うたが、一体どこを見ろと言うのじゃ?ん?」

『え?あ、うん…』

突然聞き分けが良くなった女王を訝しみながらも、ミナミは気を取り直して彼女の説得を再開した。

『…えっと、そう、アレ!道路を見て!』

ピカピカと宝玉を瞬かせながら、ミナミはレグナントの右腕をすっと動かした。一度派手に動かしてコツでも掴んだのか、ミナミにもある程度レグナントの肉体に、自身の意志を反映できる様になってきていた。

だが、そんな進歩を喜ぶヒマなど、今のミナミにはない。

『あの剣を止めないと!あんなやり方じゃ、中の人たちが死んじゃうよ!』

「なんじゃと?」

必死なミナミの訴えを聞き、カシオペアは素直に意識を眼下の町へと向けた。

町には未だ暴走を続けるクルマたちが多数おり、そんな暴走車たちを、彼女が放った

ワインダーたちが手当たり次第に破壊している。そして、そんなクルマたちがひしめく道路を、謎の緑色の閃光が猛スピードで飛び回っていた。

「……んん?」

見知らぬ緑の光はさておき、そんな町の様相を目にしたカシオペアは、はて?と首を傾げた。

「いやいや、あんなんじゃ死なんじゃろ普通?確かに多少派手にひっくり返ったり、跳ね飛んだりはしとる様じゃが…」

『は…はぁッ!?』

すっとぼけた発言にミナミは再び声を荒げたが、カシオペアは本当に訳が分からないといった様子だった。

「いかに物理的な肉体を持つ生命体であろうと、あの程度の衝撃にも耐えられん様な脆弱な種が、かような文明を築ける筈もないじゃろうて。フツーに大丈夫じゃろ、ジョーシキ的に考えて…なぁ?」

『な……』

ミナミの精神は、あんぐりと口を開けて固まってしまった。開いた口が塞がらないとは正にこの事だ。

『な、何言ってるのさ!?』

「ふおっ!?」
思わぬ怒声が飛んできて、思わず素っ頓狂な声をあげるカシオペア。ミナミは畳み掛ける様に捲し立てた。
『ボクたち人間は、ちょっと殴られたり蹴られたりするだけで、カンタンにキズつくんだよ!?わかる!?ただヒトに殴られるだけで、すっごく痛いんだよ!?骨が欠けたり、折れたりする事だってあるんだよ!?それを、それをあんな……!』
「ファッ!?な、なんじゃとォ!?」
イヤに実感の篭った、酷く悲痛なミナミの声に、カシオペアは心底から驚愕し、慄いた。
「う、ウソじゃウソじゃ!そんなのウソじゃ!だってヨが、ヨが知ってる数多の星々では……!」
気づけば、カシオペア・レグナントは半泣き状態だった。グリーンの瞳に大粒の涙を溜めて、縋る様に胸元の宝玉に泣きついている。
そんな泣きべそ女王に、ミナミは鋭く怒声を返した。
『他所の星なんて知らないよっ!』
「ヌッ!?」
怒りと悲しみがないまぜになった幼い悲鳴に、カシオペアは強く胸をうたれた。

北空ミナミは、同年代の誰よりも『痛み』を知る少年なのだ。人々の痛みと苦しみを想像し、彼もまた涙混じりの声になっていた。
『お願い、やめてよカシオペア…もう、やめて…うぅ……』
「ぬあっ!?な、泣くなミナミ!泣くでない!」
グスグスと鼻を啜りだした幼子の精神に、女王は激しく狼狽した。
自分好みの美少年が、あろうことか自身のせいで涙を流している。そんな悲劇は、当然彼女的には大大大NGなのだ。
「よ、よぅし!ならば挽回、挽回じゃ!ミナミ、ヨは今からめちゃ挽回するぞ!ただの挽回ではない、めちゃ挽回じゃ!よーく見ておれ、ヨの勇姿!」
『グス、グスっ…え……?』
焦りに焦った声で姿勢を正したカシオペア・レグナントが、ダラダラと顔中を汗まみれにしながら言い放った。
意味がわからず首を傾げるミナミの精神に構わず、レグナントは自身の周波数を爆発的に引き上げ、ライムグリーンに輝く光のイナズマへと姿を変えた。
『う、うわっ!?なにこれ!?』
「ゆくぞミナミよ!そぉぉおおれエントリィイイイイイイイイイイイイイッツ!!」
『うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!?』

眩い不可視の電光と化したレグナントが、文字通り光の速さで急降下していく。彼女が操る黒剣が今もクルマたちを破壊している、地獄のストリートへと。
「うおぉぉぉ!ヨ、参上オオオオオッ!」
『うわぁぁぁぁぶつかるぅぅぅぅぅ!?』
そんな死ぬほど喧しい閃光が向かう先には、一足先に救助活動に勤しんでいた、もう一人の閃光が。
「えっ、何!?何!?なんか来る!?」
『おいやべぇぞスバル!よけろ、よけろ!』
「いやよけろったって!?」
超高速で飛び交う光の戦士の元に、それ以上のスピードで突っ込んでくる恐怖の緑。
戦士がそれを知覚した時には、既に遅し。強烈なグリーンのイナズマは、彼らのすぐ近くまで迫っていた。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!?」
『うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ!?』
「うおりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!」
『いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!?』
大混乱のコダマタウンに、四つの大絶叫がコダマした。

第6話：一難去って？（また一難じゃ！）

暴走車に囚われた人々の救出に尽力するロックマンに全力突撃をかましてきた、はた迷惑で喧しい緑の稲妻。

やたら雄々しい叫びを轟かせながら猛スピードで突っ込んできた恐怖の緑に、スバルとウォーロックは思わず大声をあげてしまう。

「…え？」

だが、身構えた大激突は意外にも回避された。

「待っとれ生きとれェーッ！」

閃光と化した謎の電波人間は、紙一重でロックマンの至近を通り過ぎ、今まさにロックマンが飛び込もうとしていた暴走車へと、矢の様に飛び込んでいったのだ。

「レスキューこそソルジャーッ！」

勇ましい叫び声と共に人命救助に加わった電波人間の女。スバルとウォーロックは思わず足を止めて目を見合わてしまうが、その間にもライムグリーンの光は次々と道路中のクルマたちに飛び込み、取り残された人々を救い出している。

『剣の気配も消えてやがる…スバル!』
「うん!」
すぐに気を取り直したロックマンは、再びライトグリーンの流星へと姿を変えて彼女に続いた。
あの電波人間が何を企んでいるのかは未だ分からないが、今優先すべきはそこではない。
隣人の生命と心を守る為の変身。それが自分たちの電波変換なのだから。
「これで――――」
超高速で町中を飛び交い、次へ、次へ、また次へ。ライトグリーンの流星とライムグリーンの稲妻が、コダマタウンに眩い緑の星座図を描く。
「――――ラストッ!」
二人の電波人間が魅せた全力により、コダマタウンの道路中に取り残された哀れな人々は、誰一人残す事なく安全地帯へ助け出されたのだった。
「はぁ、はぁ……」
『ま、上出来じゃねぇか?』
「だといいけど…はぁ…ふぅ…」
タウン中央の上空に架かるウェーブロードで片膝をつくロックマン。荒く息を吐い

て肩を揺らすスバルと、ぶっきらぼうに労うウォーロック。
そんな二人のすぐそばに、黒い女が舞い降りる。
「やるではないか。青い小僧に手のイヌよ」
いつの間にか町から消えていた八本の剣を再び侍らせた件の電波人間が、グリーンの瞳に不遜な光を込めてロックマンを見下ろしていた。
「っ!?」
『テメェ!』
すぐさま立ち上がって左腕を構えるロックマン。
女はヒラヒラと右手を振って、くつくつと可笑しそうに笑った。
「ククク!そう勇むな。ただの労いじゃ」
ロックマンより少し高い位置にその身を浮かばせた黒い女が、胸の下で腕を組んで尊大に二人を見下ろす。針の様に尖ったハイヒールがキラリと光り、スバルの未成熟な精神に攻撃的な恐怖を与える。スバルはゴクリと喉を鳴らし、ツバとともにその恐怖を飲み込んだ。
そんなスバルの畏怖心を知ってか知らずか、女は更に見下す様に顎をしゃくり上げ、組んだ腕に力をこめて自分の胸をグッと持ち上げた。
「その小さき身体で、よくぞヨにも並ぶ成果をあげた。宇宙を統べる女王として、ヨ直々

に褒美の言葉を賜わそう。よくぞやったな！よいこよいこじゃ！」

「……」

『……』

　好き勝手にベラベラと喋る女に白けた眼を向けるスバルとウォーロック。女は鼻高々で気づいてもいない。

「ククク、喜びのあまり声も出せんか。よいよい、許すぞ。ヨの言の葉は天上の歌、誰もが聴き惚れ酔いしれるものじゃ。いやはや、ヨってほんと罪深じゃのぅ。はぁ～罪深ぁ～」

　女は宙に浮いたまま虚空に座り、長い脚を見せつける様にして大袈裟に組みかえた。周囲にかしづく剣のうちの二本が刀身から緑の光を発し、大きな光の団扇となって女を扇ぐ。何でもない島国にある何でもない町の上空は、あっという間に女王の玉座になった。

『…おい、女！』

　突然ウォーロックが、威嚇する様に鋭い声をあげた。バクバクと動き出した左腕の相棒の唐突な言動に、スバルは首を傾げてしまう。

『オレの名はウォーロック！こっちのガキは星河スバルだ！オレたちは二人でロックマンと名乗っている！さぁ、テメェの名を言ってみな！』

「ロック？いきなりなにを」
『黙ってろ、気になることがあんだよ…おら、名乗れ！』
「…ほう？」
二振りの団扇に扇がれながら優雅に寛ぐ女王は、ロックマンにゆるりと流し目を向けて口元を歪めた。
「作法も知らぬどこぞのイヌっころかと思うておったが、なるほど躾はしてある様じゃな？先に名乗るのは大事な事じゃ。ちゃんと出来ててえらいぞウォーロック。じゃが」
ピン、と長い人差し指を立てる女。
その瞬間、女にかしづく黒い剣たちのうちの四本が、瞬間移動もかくやといった猛スピードでロックマンの周囲に殺到し、あっという間に彼らの周囲を取り囲んだ。
「なっ――――」
「ヨに対してテメェとはなんじゃテメェとは？おい。ヨは女王ぞ？ん？マジで不敬なんじゃけど？」
『……』
突然向けられた鋭い切先と殺意に気圧され、スバルの喉からは震えた声が漏れたが、歴戦の闘士であるウォーロックは動じない。変わらず女を睨み続ける相棒の鋭い赤眼に、スバルは尊敬にも似た頼もしさを覚えた。

「ふん、まあよいわ。ケモノに作法などはなから縁なきモノよな。先の働きもある。許してやるぞウォーロック。ほれほれどうじゃ嬉しかろう。キャンとひと鳴き鳴いてみよ。ほれ、キャンと」

『フゥー…フゥー……!!』

「（あ、すごい怒ってる）」

額にビキビキと極太の血管を浮かばせる青いケモノの頭。短気で粗暴な性格がトレードマークな相棒が見せた意外な我慢強さに、スバルはこっそり感心した。

（でもやっぱりヘンだよ。こんなのロックらしくない）

未だに秘密主義が抜けきらないウォーロックの企みを訝しみながら、スバルは改めて自分たちを見下ろす黒い電波人間を睨み上げた。

「あーダル。言っとくけどアレじゃから。ヨのシマだったらマジで串刺し案件じゃから」

尊大に言ってのけた女はすっと立ち上がり、再び胸の下で腕を組んで虚空に仁王立ちした。

「我が名は」

――その時だった。

「カシオぽげやっ!?」

「あ」
『あ』
ガクン！と前につんのめり、ロックマンのとなりにべちゃりと倒れ伏す女。
女の黒い後頭部は、背後から押し寄せてきたモエローダーの群勢に思い切りしばき倒されたのだ。
上空のウェーブロードにいつの間にか集結していた大量のモエローダーたちが次々と殺到し、女の背中をバシバシと轢き倒していく。
「あばばばばばばばばば!?」
「だ、だいじょぶ!?」
「だいじょばぬッ!!」
情けない悲鳴をあげる女の細い背中を轢いたモエローダーたちは、その勢いのままにぽんぽんと飛び跳ねて周囲のウェーブロードへと飛び移り、女とロックマンたちを取り囲んでいく。
「ロック！」
『ったく話の途中だってのによ！』
素早く体勢を整えるロックマンの足元で、ぷすぷすとケムリをあげる黒焦げの女。
『ちっ。おいバカ女、生きてるか？』

みっともなく大の字に倒れ伏した女に、吐きつける様に声をかけるウォーロック。
女はぴくりと耳を痙攣させたかと思うと、ガバリと勢いよく立ち上がり。激しく頭を振って全身の焦げを振り落とした後、血を吐く様に絶叫した。
「バカとはなんじゃ!!!!!」
『そっちかよ』
「だいじょぶそうだね」
多分に呆れを込めたジト目で女を見やるスバルとウォーロック。この短時間で、彼らはすっかりこの電波人間の扱い方を把握していた。
「えぇい、ゆ゛る゛さ゛ん゛！こんくそったれのアチアチどもが！よくもこのカシオペアの背中を荒々しくウェルダンにしてくれおったな！最早容赦も戯れも不要！チリひとつ残さず消し飛ばしてくれるわ！おいロックマン！」
「えっ!?」
突然名前を呼ばれて驚くスバルに、女は右手にライムグリーンに輝く光の鞭を出現させながら完全にキレた声で怒鳴りつけた。
「キサマはそっちの半分をやれ！ヨはこっちのヤツらに誅を下す！」
「え、は、はい！」
「励めよッ！」

反射的に返事をしてしまったスバルに目もくれず、女は『おんどりゃあぁぁ!!』と絶叫しながら上空のウェーブロードへと猛スピードで飛翔していった。
『くそっ、ふざけた女だ』
「ほんとにね…でもウィルスはやっつけないと!」
『あぁ!ムカつくけどな!』
腑には落ちないが、それはそれ。ロックマンは過去に類を見ない電波ウィルスの大群を駆除する為、とっておきの切り札を宙に放った。
「スターブレイク!」
天馬の紋章が描かれた特別なカードが宙を舞い、それをウォーロックが荒々しく捕食する。
瞬間、ロックマンの全身は眩い光に包まれ、青白いアーマーと翼を備えた、神々しい姿へと進化を遂げた。
「ロックマン、アイスペガサス!」